第八回

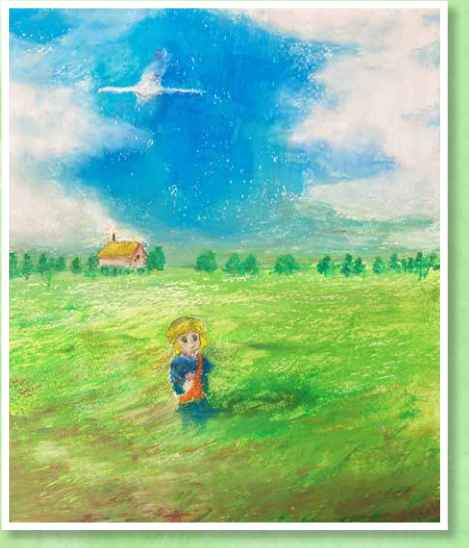
星槎文芸大賞

令和四年度

受賞作品集

SEISA 星槎グループ

「幸福の鳥と大樹」金井菜美恵（星槎国際高等学校横浜鴨居１年）



「ロロの夢」
小笠原香乃衣（星槎学園大宮校３年）

SEISA

「空と海」
今林　笑那（星槎国際高等学校福岡東１年）

令和四年度受賞作品

【最優秀賞】
小説
「現代のムルソー」……2
星槎国際高等学校八王子　一年　樋野せりな

【優秀賞】
小説
「いってらっしゃい」……10
星槎国際高等学校那覇　二年　田島　幸汰

【優秀賞】
エッセイ
「星槎はみんなでつくる集合体」……14
星槎もみじ中学校　三年　堀口　尊斗

【優秀賞】
エッセイ
「「楽しい」の代償」……15
星槎国際高等学校立川　三年　柴崎　雪乃

【審査員特別賞】
詩
「涙雨」……17
星槎国際高等学校富山　一年　吉田　茉央

【部門賞】
小説
「晩夏に散る」……17
星槎国際高等学校静岡　一年　小原　麗羽

【部門賞】
小論文
「アイデンティティとリアリティー」……27
星槎学園高等部大宮校　三年　木口　菜月

【部門賞】
エッセイ
「僕が星槎に決めたわけ」……27
星槎学園高等部大宮校　二年　田中　晴也

【部門賞】
詩
「僕はクール」……28
星槎国際高等学校那覇　三年　上地　安人

【部門賞】
詩
「ｃａｖｉｔｙ」……29
星槎国際高等学校八王子　二年　多比羅　興

【部門賞】
俳句……29
星槎学園北斗校　一年　大澤　祐仁

【部門賞】
短歌……29
星槎国際高等学校大阪（高知高等学院）　二年　川田　瑚春

【生徒会特別賞】
俳句……29
星槎国際高等学校八王子　三年　小林　碧

【星槎大学長賞】
小論文
「共生社会実現に向けての考え方」……30
星槎国際高等学校郡山　三年　齋藤　優佳

【星槎道都大学長賞】
小論文
「共生社会の実現」……30
星槎学園北斗校　三年　牧井　葵

【中学生部門賞】
詩
「空」……31
星槎学園中等部大宮校　二年　宮﨑菜々子

【中学生部門賞】
俳句……32
星槎もみじ中学校　三年　岡崎　良亮

【中学生部門賞】
短歌……32
星槎中学校　三年　飯塚　琉冬

【最優秀賞　小説部門　受賞】

「現代のムルソー」

星槎国際高等学校八王子
一年　樋野　せりな

「一人の人間の運命とはもしその人間が情熱を抱いてそれを背負うと、いつも情熱的になってしまう。そして或る種の人々にとっては、情熱的な運命とは、つねにお誂え向きな運命なんです。」
アルベール・カミュ　幸福な死　第二部：意識された死より

第一章

僕は市川海人。

２００２年、８月10日生まれ、血液型はＢ型、身長は１６７ｃｍだ。

特に海が好きというわけでもないが、海人という名前をつけられた。

生まれる前に決められたのだから仕方がないと思いつつも、やはり好きでもない単語を名前につけられると違和感が拭えないもので、自己紹介の時に名前を名乗るのもどうにも気が進まなかった。

聞こえは普通の名前だが、鉛筆やペンで名前を書くときは特に、何故こんな名前を付けたのだろうと思わずにはいられなかった。

その名前が原因ではないのだが、僕は昔から不祥事というか、細かいトラブルに巻き込まれた。

まず覚えているもので一番昔のトラブルは幼稚園の時、同い年の子供が物を失くした時のことだった。

「たろうのおもちゃとったでしょ！」

たしかたろうと言ったか、一人称が自分の名前だったので覚えている。

たろうはみっともなく泣きじゃくりながらそれはもう騒がしく僕を犯人だと叫び散らした。

「かいと君、本当なの？」

先生の言葉にその場の全員の視線が僕に突き刺さった。

疑わしげに僕を見る者、何も分からずになんとなくでこちらを見る者、困ったように僕を見る先生の視線が一斉に僕に殺到し、その頃まだ幼かった僕は泣きそうになった。

「違う。ちょっと借りただけ。ちゃんとたろう君にも言った。」

「きいてない！」

「それはたろう君が聞いてなかっただけ……」

「でも、ちゃんと確認してから借りないとダメでしょ？」

先生にそう責め立てられ、僕はこの場の空気に従って謝ることにした。

僕にしてみれば納得がいかなかったのでこの出来事は今も覚えている。

次に巻き込まれたトラブルは小学3年生の頃だった。

ある日体育の授業から一番に教室に着くと、教室に飾ってあった花瓶が床に落ちて割れていた。

教室には生徒のランドセルなどの荷物を置くためのロッカーがあり、ちょうど僕のロッカーの上に飾ってあった花瓶だった。

僕が呆然とその花瓶を眺めていると、そこへ他の男子生徒が集まってきた。

「あー！　花瓶割れてるー！」

子供というものはこういう性分なのか、誰かが問題を起こすと騒ぎ立てて犯人を責め立てるのだった。

「いけないんだ～！」

僕も流石にムッとして、その生徒に反論した。

「僕が割ったんじゃない。僕が教室に着いた時にはもう割れてた。」

「嘘つき！　だってその花瓶、お前のロッカーに置いてあったじゃん！」

「しつこいな……僕が割った証拠があるのか？」

その時、担任の教師が合流した。

「あーあー、床水浸しじゃないかー……おい、破片に触るなよ。先生が片付けるから。」

そう言って床を拭こうとする先生に僕は念のため話しかけた。

「僕は割ってません。」

「あー、そこの太一に言われたんだろ？　言わせときゃあ良いんだよ。どうせ今のうちだけなんだから。」

先生はただそれだけ言って花瓶の片付けに入った。

僕に突っかかってきた……そう、太一は「嘘つき」と吐き捨てるように言って先生に怒られていた。

その時、チラチラとこちらを見ている生徒に気づいたが、僕は見て見ぬふりをした。

真犯人を突き出したところで何の意味も無いことは分かっていたし、何より太一と同類に成り下がるのが嫌だった。

たかが花瓶を割っただけの罪を責め立てる事は馬鹿馬鹿しいことだし、時間の無駄だと思った。

細かいことを話しているときりがないので話を選ぶことにしよう。

そう言えば、中学に入ってからはトラブルの重さが一段階重くなった気がする。

そう……いじめだ。

「市川～、ちょっと金貸せよ。」

まるで金を貸してもらえることが当たり前かのように僕に絡んでくる2年生の〝先輩〟を僕は無感情に見つめた。

「……この前貸したお金は？」

「もうちょっと待てよ。それよりまた金が必要になっちまったんだよ。なあ～、貸してくれよ～」

そう言って右手を差し出してくる先輩に僕はいよいよ嫌気が差し、先輩に思い切って言い返した。

「借りたお金を返さないような人に貸すお金はありません。僕だってお金持ちじゃないんですよ。」

そう言うと先輩は急に態度を変えて僕に突っかかってきた。

「良いから金貸せって言ってんだよ！　お前は俺の言う通り金出せば良いんだよ！　さっさと出せ！」

そう言って胸倉を掴まれて僕はため息をついた。

……ああ、面倒くさい。

僕がそう思っていると他の生徒が危機感を覚えたのか教師を連れて僕達の下へ駆けつけてきた。

この事を知った母親は転校を考えていたが、僕は面倒なので転校しない旨を伝えてその後3年間中学校に通い続けた。

あれ以降例の先輩は僕に絡んで来なくなった。

周りがどうにかしてくれる環境だったからこそエスカレートせずに済んだのだろう。

だが、それは中学校だけの話だった。

高校生になると入った高校が悪かったのか、それとも運が悪かったのかいじめが勃発した。

受けたいじめ行為としてはカツアゲ、罵倒、多少の暴行、数えきれない程の嫌がらせが挙げられる。

ある程度成長して悪知恵をつけたのか、そのいじめは目立つように行われることは無かった。

カツアゲは人気の無い場所で行われたし、暴行されて怪我を負ってもその場所は服を脱がないと見えないような場所だった。

徹底的に人目につかないように隠れてやることを意識していた。

毎日何かしらの嫌がらせを受けながら学校に通い続けて僕は気づいた。

人間なんてものは曖昧で信用に足らないものだ。

分かっているふりをしながら本質は何も見えていない。

僕を虐める者達も、何も知らずに話しかけてくる友人も、何も知らない同級生たちも、大人たちも。

僕のことも人のことも自分のことも世界のこともまるで何も分かっていないのだ。

そしてそれは僕も同じなのだ。

人のことが何も理解できない。

両親のことも、友人のことも、何故ここまで虐げられるのかも、自分が何をしたいのかも分からない。

……知りたいとも思わない。

そう思って僕は同級生に怒鳴られながらあくびをした。

なんだか僕を虐める同級生が滑稽に思えた。

その後、僕は無事に卒業し、就職した。
特に人との連携を必要とされない事務作業は僕にうってつけの仕事だった。
だが、そんな仕事にも嫌でもやらなければならないことはある。
飲み会だ。
必ず誰かしらと喋らなければならない飲み会は僕が一番苦手とするものだった。
居酒屋の隅っこでちびちびとビールを飲んでいると、いつものように吉田部長が絡んできた。
「おう、市川！　相変わらず一人で飲んでるのか！」
「話すことも無いのでとりあえず飲んでいるだけです。」
「つまらない飲み方してるな……ほら、お前一人だけでもぽつんとしてたら俺の印象下がるから一緒に飲むぞ。」
僕は言われるがまま吉田部長と酒を酌み交わした。
この人の正直で、ある意味自分勝手な所は気に入っていた。
「ところで……お前、同じ班のやつとはどうなんだ？」
「特に何も。むしろトラブルがあった方が嫌でしょう。」
「む……お前、対人恐怖症ってわけじゃないんだよな……？」
「さあ……精神科に掛かったことも無いので。」
そう答える僕を見て吉田部長は顎に手をやりながら何か考え込んでいた。
「……一旦診てもらったらどうだ？　良い先生を知ってるから相談でも何でも話してこい。」
「……何故そこまでしないといけないんですか？」
「何故って……お前に似てるやつならお前のことを理解できるかもしれないだろ？」
「別に誰かに理解してほしいだなんて思ってませんが……」
「良いから相談してみろって。あいつとは絶対気が合う筈だ！」
そうして押し付けられる形式で渡された名刺が、思わぬ結果を招くとはその時の僕は知らなかった。
「……それで私に会いに来たと。」

あるカフェのテラス席にて。
吉田部長に約束を取り付けてもらい、僕は例の先生に会いに来ていた。
目の前の先生はどこか呆れたような目で、後ろで縛った長い髪を揺らしながらこちらを見た。
「ええ。まあ……」
「……何も言われたとおりにしなくても良いでしょう。自分で判断出来る人の筈でしょう、貴方は。」
「……」
もしかしたら。
そんな考えが浮かんだ。
「……もしかしたら、僕は貴方に話を聞いてほしいと思ったのかもしれませんね。」
そう言ってみると、先生はじっと僕を見た。
「……分かりました。貴方がそう望んでいるのなら話を聞きましょう。相手が精神科の医師でも良いのなら、ですが。」
「ありがとうございます。烏丸先生。」
その先生は烏丸倫太郎と言う名前だった。
そして、吉田部長に言われた通り、その先生とは気が合った。
「まず、好きなものと嫌いなものを聞きましょうか。」
「……好きなもの、ですか。」
「ええ。食べ物でも言葉でも……下品なものでも結構です。」
「……本が好きです。」
「特に好きな本はありますか？　作者とか……」
「……カミュの異邦人が好きです。」
僕がそう言うと、先生が僕を見て目を瞬かせ、反応を示した。
――異邦人はアルベール・カミュが書いた小説で、ムルソーというどこか世間とはズレた男の日常が描かれるが、最終的に殺人を犯してしまい、世間から彼の変わった一面が弾圧されたことで死刑を宣告されてしまうという話だ。
「何か？」
「いや……失礼、知っている本だったもので。」

「……ペストはお読みになりましたか？」
「ええ。カミュの本で特に好きな本です。」
「じゃあ、幸福な死は？」
「勿論読みましたよ。異邦人のムルソーとペストのリウーの原型になった登場人物が出てくる作品ですから。まあ……少し読みづらかったですがね。」
ここにきて先生が笑顔を見せた。
苦笑いともとれる笑顔だったが、やはり意外なものだった。
人の良さそうな笑顔だった。
「……ああ、すみません。話が逸れましたね。」
「いえ、僕も好きなので。語り合える人がなかなか居なかったので嬉しいです。」
その時、僕は初めて笑った。
ようやく人に期待しても良いのだと思えたからだろうか。
ここ数年間でようやく楽しいと思うことが出来たからだろうか。
「……さて、話を戻しましょうか。申し訳ないのですがね……」
先生は僕に極力気づかれないようにメモ帳に視線を落として時計を確認した。
「さっきの好きなものとは反対に……嫌いなものはありますか？」
「……しいて言うなら、自分の名前です。」
「理由は？」
「海が好きというわけでもないのに〝海人〟なんて名前を付けられたからです。」
先生がメモ帳に走らせていたペンを止めて考え出したので、僕は補足として自分の名前を説明した。
「海の人って書いて海人です。」
「……ああ、なるほど。他の〝と〟ならまだしも〝人〟ですか……確かに気になりますね。」
「好きでもないものを名前にされるのがどうにも納得いかないんです。改名したいってわけじゃないんですけどね……」
「意外ですね。実際に自分の名前を変えた人は結構居ますけど……」

「……母親が付けてくれた名前ですから。不満があっても今更捨てがたい物なんです。」
「なるほど。愛着みたいなものですか。」
「まあ、そんな感じです。」
「……ご家族について聞いても？」
「良いですよ。家族構成ですか？」
「ええ。出来れば貴方がどう思っているかも説明していただけるとありがたいです。」
「今は一人暮らしですが、少し前まで母と暮らしていました。父は僕が子供の頃に他界しました。」
「……お母様とお兄様についてはどう思っていますか？」
「母は正義感が強くて、ニュースで自分が信じられないような事件が報道されるとその犯人に対して憤慨するような人でした。怒ったところでどうなるわけでもないのに……」
「……貴方は違った、と？」
「善悪にこだわるのが面倒くさくなったんです。母のようにその場に居ない悪人に怒りを覚えていては生きるのが辛くなる。」
「……それはごもっともですね。嫌なことに囚われると1日過ごすことも嫌になる。気持ちを入れ替えるのは大切なことだ。」
「……あの人は多分メディアに振り回される人だ。そういう点では心配です。まあ、振り回されたとしても事件沙汰にはならないでしょうが。」
そこまで話すと、僕が口調を崩したからか先生も口調を崩し始めた。
「お父様について何か思うことはありますか？」
「……ろくでもない人でした。死因がアルコール中毒でしたから。」
僕は母親に嫌というほど聞かされた父親の愚痴を思い出し、うんざりとした。
「……そうですか。」
「すみません、愚痴みたいになってしまいました。」
「いえ。よくある事なのでお気になさらず。」
先生は顔色一つ変えずにメモ帳にペンを走らせた。

「……質問の傾向を変えましょうか。例えば目の前で転んだ子供が居て泣き始めたら、貴方はどうしますか？」
「……通り過ぎます。」
「それは何故？」
「子供が一人で出歩くなんてことはない筈だ。必ずその近くには親とか友達とかが居る。ならわざわざ他人である僕が助けなくても良い。普通の人も大抵はそうする。」
「……なるほど。まさか問題の穴を突かれるとは思いませんでしたよ。」
　先生がメモ帳に素早く何かを書き留めている間、僕は道を行く人達の声と車の音に耳を傾けていた。
「……出来るだけ難しく考えずに答えていただきたいのですが……もし、貴方が人を殺すとしたら、それはどんな理由だと思いますか？」
　僕は直感的に思いついた答えがあったが、それは答えずに自分で考えてみることにした。
「不可抗力だと思います。つい階段から突き落としてしまったとか、そんな風に。」
「……私怨とかではなく、不可抗力。」
「ええ。人を殺したいと思うことが無いもので。」
　先生はメモを書き終わると、口元に手を当てて考え込んだ。
「……やはり、貴方の思考に何か問題があるようには思えません。あくまでも客観的で、それに……思考力がある。」
「そうですか。」
「まあ、吉田が私を貴方に紹介したのは別の理由なのでしょうが……」
「……お忙しい中すみません。」
　僕がそう言うと、先生はぽかんと口を開けた。
「さっき時計を確認していたでしょう？」
「……見えていたんですか……貴方が気に病むことはありませんよ。呼んだのは吉田ですから。」
「あの人は何かと事を大きくしたがる。勿論、僕に問題があったからでしょうけど……」
「……ああ、そうだ。」
　先生は懐から名刺を出して僕に手渡した。
「気が向いたら連絡してください。休診日には時間が作れますので。」
「……わざわざ休診日に？」
「ええ。貴方は患者ではないので。」
　僕は名刺を貰って先生と一緒に席を立った。
「……あなたほど真剣に話を聞いてくれる人が精神科の医師をやっているなら儲かるでしょうね。」
　僕は先生を試すように少し下品なことを言ってみた。
　勿論冗談の域ではあるが、先生がどんな反応をするのかが気になった。
　先生は眉の端を下げたが、いたって真面目な表情で言ってのけた。
「懐が潤ったところで患者に割く時間が無ければこの仕事は成立しないんですよ。それに……診療したところで皆が皆立ち直れるとは限らない。」
　先生の表情に陰りが見えて、僕ははっとした。
「……すみません。失礼なことを聞きましたね。」
「いえ。お気になさらず。」
　先生は笑ってみせたが、明らかに作り笑いだった。
「では、また後日。」
　先生は支払いを済ませてから足早に立ち去って行った。
　その背中を見て、僕は不思議と寂しさを覚えた。

第二章

　あれから僕は先生とよく会うようになった。
　会うと言っても大した事はせずにカフェや居酒屋で話すぐらいなのだが、あまり人と話すことの無い僕にとってはかなり充実した時間になっていた。
　その日は電車が遅延しており、ただでさえ混んでいる時間帯の電車が更に混んでいる時の事だった。

　自分が降りる駅に着いたので降りようとした瞬間……
「？」
　突然腕を掴まれ、ぐいっと引かれる。
　腕を掴んだ相手は女のようだった。
「この人、痴漢です！」
「……え……」
　女が叫んだ瞬間、その背後で走り出す男が見えたので追いかけようとしたが、女に腕を掴まれていたため、それは叶わなかった。
「……あの、後ろ……」
　そう言って背後を指さすが、周りの男たちに睨まれた。
「あんた、こっから動くなよ。」
「いや、でも向こうに怪しい奴が……」
　女の背後を見ようとするが、野次馬たちのせいで見ることが出来なかった。
　泣き出した女を見てその場の全員がキッと僕を見た。
（はあ……駅員に任せるしかないか……）
　半ば諦めていたその時だった。
「やけに騒がしいですけど……」
　聞いたことのある声が耳に届いた。
「もしかして、この人が犯人ですか？」
「……烏丸、さん……」
　先生が先ほどの男を引きずって人混みをかき分けながらこちらに来てくれた。
　そして僕と目が合うとにっこりと微笑んだ。
「まさか貴方だったとは。」
　それから発車を確認していた駅員が駆けつけて僕が事情を説明するとすんなりとあの男が犯人だということを認めてくれた。
　監視カメラが決定的な証拠になったのも手伝って事は速く済んだ。
　後から被害者の女は勿論、あの場の全員に謝罪をされたが、僕はどうでも良かったので適当に取り繕って先生と共にその場を去った。
「烏丸さん、ありがとうございました。助かりました。」
「いえいえ。それにしても災難でしたね。」
「昔からこうなんですよ。ここまで来るともう慣れっこです。」
「……」
　先生は何か言いたげに僕を見た。
「どうかしましたか？」
「……貴方は自分が当事者であるという自覚を持った方が良い。監視カメラの映像が無かったら貴方が汚名を着せられるところだったんですよ。」
　先生は真剣な顔をして僕にそう言った。
「私があの場に居なかったら貴方に味方をする人は誰一人居なかった。なのに貴方はその場の空気に流されようとしていた。……駄目ですよ。自分の身の潔白は自分しか証明出来ないんですよ？」
　……これはきっと説教というものなのだろう。
　先生はこれほどまでに人のことを考えられる人なのだ。
「……あ……すみません……」
　先生ははっとして僕に頭を下げた。
「……いや……平気です。烏丸さんの言っていることも間違ってはいないでしょうから。」
「……」
　きっと先生の期待していた答えではなかったのだろう。
　先生はじっと僕を見つめてきた。
「……やっぱり貴方はムルソーに似ている。」
「そう言う烏丸さんもリウーそっくりですよ。」
　先生は眉をひそめて僕を見た。
　僕は笑って先生を見た。
　先生はペスト医師のベルナール・リウー。
　僕は異邦人のムルソー。
　物語の登場人物との不思議な共通点に僕は得も知れぬ喜びを感じていた。
「……貴方が本当に殺人を犯さないことを祈りますよ。」

「しませんよ、そんなこと。なるとしたら事件の関係者でしょう。」
冗談のつもりでそう言ってみると先生は呆れたようにため息をついた。
僕は頭上を飛んでいく鳩を見上げて笑った。
先生と患者ではなく、対等な関係を築けたのが嬉しかった。
今まで一方的に攻撃されて、それを受け入れてきたが、今回ばかりは人に助けられた。
人に期待しても良いのだと、そう思えた。
それだけでも、生きる価値はあるものだと、そう思えた。
『何人も、何人といえども、ママンのことを泣く権利はない。』
異邦人の終盤の台詞を読み上げて僕は言った。
「……この台詞が僕は一番好きなんですよ。ムルソーにしか理解できない、母親のことがこの言葉に詰まっている気がして。」
先生は深く頷いた。
「第三者には決して分からない事は確かにあります。序盤では読み取りづらいがムルソーと母親の絆は確かにあった。」
「……今の時代、そこまで理解し合える人は居るんでしょうか。」
「そう居ないからこそ喧嘩や戦争は起こる。人の事を理解出来ていたらそんなものは起こり得ないんですよ。」
「……僕は争いも事件も無い世界が来るとは思えません。」
「来ませんよ。そんなことが出来ていたら今すぐにでも争いは終わっている。……理想通りにいくほど世の中は優しくない。」
先生はグラスに入ったブランデーを飲んでため息をついた。
……最近先生はこうして愚痴や悩みを溢すことが多くなった。
やはり精神科の医者である以上人の悩みを聞かなければならないのでストレスが溜まるのだろう。
「……だからこそ、理想を叶えようと必死になるキャラクターが魅力的に見えるんでしょうね。物語の中ではどんな理想も叶えられますから。」
「結局、好きな登場人物への感情は憧憬に過ぎないんですよ。自分が出来ないことを成し遂げてくれるんですからね。」
「リウーは烏丸さんのやりたいことをやってくれたんですか?」
「……厳密に言うと、憧れに近いです。彼のように生きることが出来たら……と。少し恥ずかしいですが。」
「……宮沢賢治と似た考え方ですね。」
「雨ニモマケズ、ですか。」
「……僕は案外、ああ言った生き方が出来ているのかもしれませんね。そうありたいと願っている人よりも……」
先生はそれを聞いて目を閉じた。
「……誰もがこうありたい、こんな生き方をしたいと願って生きている。それでも思い通りにいかない。私の下に来るのはそう言う人達です。その気持ちは痛いほどに分かるはずなのに、かけるべき言葉が分からないんですよ。」
「……」
「あの人達自身が納得出来るような答えを選ばなければなりませんから。大変ですよ。この仕事は。」
「……気苦労の多い烏丸さんに言うのもなんですけど……僕は貴方に向いていると思います。精神科の医師。」
「……誉め言葉と捉えておきましょうか。」
そうして二人、笑って最後の一杯を飲み干した。
僕達が生きていくこの世界は非常に不条理で厳しい世界だ。
その場の人間たちと少しでも考え方が合わなければ孤立させられることだってある。インターネットは特に明白だ。
最近になって少数派の意見も尊重しようと言う意見を述べる者も多くなってきたが、それは新たな少数派を生み、結局のところ多数派が正義だとする理論は消えて無くならないことに気づいていないのだ。
僕はそんな世の中に対して中立であり続けることこそが争いを生まない一つの方法だと思っている。
それは多数派と少数派だけでなく、正義と悪の二つに対しても

そうだ。
僕の話が一体どれほどの人に読まれるのか、それは分からないが……
もしインターネットの悪意やニュースで報じられる事件に正義感を燃やして、それで疲れて居るのだとしたら、一度中立な立場になって考えてみてはどうだろうか。
少なくとも悩まなくても良い事に悩まされることは少なくなると思う。
それともう一つ。
友人は大切にした方が良い。
もし自分とは真逆の性格だったとしても、友人である以上、切り離せないものはある筈だからだ。
最後にもう一つ。
こんな不条理な世の中でも、生き抜く事を諦めないでほしい。
なんとなくでも生きていて良かったと、そう思える日が来るはずだから。
End

出典

『異邦人』アルベール・カミュ
作中で紹介した通りの内容。作中で市川と似ていると言われているムルソーはこの本の登場人物であり、主人公。

『ペスト』アルベール・カミュ
アルジェリアのオラン市でペストが流行し、ペストに対しどう抗い、戦うかという市の人間たちの戦いを描いたカミュの代表作の一つ。
作中で烏丸と似ていると言われているベルナール・リウーはこの本の登場人物であり、主人公。

『幸福な死』アルベール・カミュ
異邦人を中心にペストのリウーの原型にもなった作品。
メルソーが殺人を犯し、その相手から奪った金で海沿いの家で三人の女と暮らし、死を迎えるまでの人生を描いた物語。
リウーの原型となった登場人物が中盤から登場する。

『雨ニモマケズ』宮沢賢治
宮沢賢治の死後に発見された遺作のメモ。
宮沢賢治の願望が書かれているとされる。

登場人物

市川海人
２００２年８月１０日生まれ。Ｂ型。１６７㎝。
怒りや悲しみといった感情をほとんど感じることがない。人に嫌われるのも苦ではないので人の反応を気にせず意見を述べる。それとは逆に人と無理に関わろうとすることも無いのでその点を吉田部長や烏丸に心配されている。
過去の出来事から世間の不信感が強く、他人はおろか友人に対しても大して期待をしていない。

烏丸倫太郎
１９９４年生まれ。１８５㎝。精神科医。
人に言われて自分に会いに来た市川をなだめ、相談役になる。
真面目で人の悩みを自分の悩みのように考えてしまうため、感情を抑えて仕事をする。そのため人から誤解されることも多いが、これが不条理な世界を渡り歩いていく為の彼なりの処世術なのである。

吉田部長
市川の上司。下の名前が出てこないのは市川が名前を覚えていないからである。
他人の評価を気にしていながら正直過ぎるきらいがある。だがその点を市川は評価している。

【優秀賞　小説部門　受賞】

「いってらっしゃい」

星槎国際高等学校那覇
二年　田島　幸汰

新学期から半年が経って、夏休みが終わり、学校が再開し絶望している人もいれば、また友達と会えることに歓喜している人もいる九月。高校の二年三組にいる僕は、あることを諦めていた。

普通は夏休みの課題なんて思うかも知れないが、それは違う。僕が諦めたのは友達作りである。

高校に入ってたくさん友達を作り、高校生活をエンジョイするはずだったのに、誰かに話しかけようとしても上手く話せない。空気的存在の僕だから、相手から話しかけられることもない。そうして、今の今まで誰一人とも喋ったことがないという状態になってしまった。

夏休みも終わってしまって、完全にクラスや学年内でグループが出来てしまい、僕が入れる隙間はなくなった。そんな気がするのだ。もうこのまま、僕がこの学校から居なくなるまで、誰とも関わりを持たずに終わってしまうのだろうか…。

でも、そんな僕にも好きな人はいる。

あの子とは、今年の四月にクラスメイトとしてこの教室で初めて出会った。

教室の窓から入る風にく肩より長いサラサラな黒い髪、春の太陽の光のような優しさを持っている二重の大きい目、小さくて収まりのいい鼻に、左下にほくろがあり、プルプルに潤った唇。そんな顔で作る、無邪気で爽やかな、見る人誰をも魅了する笑顔に、僕自身も魅了されてしまったのだ。

恋をするなんて、初めてで、最初はそれがどんな感情なのか分からなかった。クラスメイトの話や、国語の教科書に出てくる、昔の恋愛小説の話を見たり聞いたりして、やっと、それが【好き】という感情だと気づけた。

もちろん。あの子と話すことは出来ていない。普通のクラスメイトにも話しかけられないのに、好きな人になんて出来るはずがなかった。最近の恋愛小説やライトノベルでは夏休みに学校の外で偶然会って、仲良くなるなんて展開があるが、もちろん僕なんかにそんな奇跡が起こることはなく、あの子とは一回も会えないまま二学期が始まってしまった。

あの子の席は一番窓側の真ん中辺りの席、僕は一番後ろの真ん中くらい。気持ち悪いかなとは思うが、いろんなタイミングのあの子がよく見える。

勉強するときの真剣な眼差し、髪を耳にかける仕草。後ろにプリントを配るときの丁寧な配り方や笑顔。昼食時に髪を結ぶ動作、お弁当も自分で作っているみたいで、たまに「味付け失敗した……」と頭を抱えているところ。読書が好きで、休み時間に本を読んでいる時に、よく見ると本の展開によって少し表情が変わるところ。それで、家に帰ってもずっと読んでいたのか、翌日の授業中に少し眠そうにしていて、休み時間や放課後に慌ててノートをまとめているところ。僕があの子の好きなところの一部に過ぎない。

国語が得意で数学は少し苦手ってあの子が友達と話しているのを聞いて知ったけど、テストの点数は全部平均以上で、もう三年の範囲もやり始めているらしい。たまに机に全く見たことがない参考書を開いて勉強しているのを見る。きっと三年生向けの参考書だろう。

僕なんて、あの子が得意な国語を僕も得意になりたいと思って、授業をたくさん聞いて、二年の範囲の国語が少し出来るようになったくらいで、他の教科はほとんど出来ない。特に芸術、家庭、理科がお手上げ状態で……。いや、お手上げなんてもんじゃない。今、どのページをやっているのかもわからないくらいだ。

それに、あの子と違って僕は運動音痴。体育も出来ない。

七月のある日の休み時間、教室でクラスメイトの男子数名がふざけてボールを投げて遊んでいたときに、ボールがあの子に向かって飛んで行ってしまった。あの子はその飛んできたボールに気づき、まるでボールがあの子を避けたかのように、ほとんど動かずにボールを避けた。その後ボールはバウンドし、次の瞬間僕に向かって飛んできた。そのとき僕はボールに気づいていたのに、動いて避けるわけでもなく、手でキャッチするわけでもなく、正面から当たってしまったのだ。幸い、ボールはソフトバレーに使うような柔らかなボールだったので僕はビクともしなかったが、あの子の運動神経の高さを知れたのと同時に、こういうときに動けない僕のことがなんだか悲しくなった。

あの子は、クラスのヒロイン的存在で愛想も良くて、少し抜けた性格をしている優等生だ。空気的存在の僕があの子に関わろうとするなんて天変地異でも起きない限り不可能だろう。

でも、もし、あの子と仲良くなれたらと空想することもある。

朝は「おはよう」放課後には「また明日ね」って僕に向かって言ってくれたり、もっと仲良くなって、僕が上手くお話ができたら、あの遠くからしか見られなかった、あの笑顔を僕にも向けてくれたり、他にも、放課後に勉強教えてもらって、一緒に帰ることが出来たり、もし……もっともっと仲良くなれたら……付き合えたり……なんて出来ちゃうんだろうな……。

でも、あの子のことを好きなのは僕だけじゃないのは分かっている。同じクラスにあの子のことが好きな奴が知っている限り五名いる。

放課後の教室では、たまに恋愛の話をクラスメイトがしているのが聞こえる。誰が誰を好きとか、誰と誰が付き合っているといった話だ。

最近だと、うちのクラスの三浦が一組の女子と付き合ったという話を聞いた。そうやって、恋愛話をこっそり聞くたびに、あの子のことが好きな奴の話も結構聞いてきた。

そいつらのことを、数日間観察しているいと、あの子のことをチラチラ見たり、何かとあの子に声をかけて話したりしているのだ。その中で、特に厄介だなと思うのが、磯村だ。あいつは、この学年で喋ったことがない人がいないくらいのコミュ力と、運動神経が学年でも抜きん出ていて、三年生を差し置いてサッカー部のキャプテンになったらしい。

僕としては、恋敵のあいつの情報なんて知りたくもなかったが、同じクラスであることと人気者なせいで、嫌でも情報が入ってくる。それにあいつは、あの子と放課後まで一緒にいたいのか、あの子に「サッカー部のマネージャーになってくれないか」と、ずっと勧誘し続けているのだ。その度にあの子から「私、学校終わったら、妹の学童のお迎えがあって、行かないといけないんだよね。だから、マネージャー出来ないんだよね。ごめんね。」と断られているが、今度はその勧誘を話し始めのネタとして消化して、あの子と雑談を始めるのだ。そこで、あの子が「ごめんね。次の授業の準備したいから、また後で話そう。」というと、大体の奴らが引き下がるのに、そこで引き下がらないのが、磯村だ。あいつは「あ、じゃあ聞いてるだけでいいから！」といって話をやめない。

『僕があの子と話したことなんてないのに、お前が毎日あの子に話しかけてお喋りしてんじゃねーよ！』

そう思うだけのつもりでいたけど、口に出ていたと思う。多分……。

確かに、気楽に人に話しかける性格とノリの良さがあるあいつだから出来ることだと思うが、僕からしてみれば、「仲良くなりたい」だとか、「あの子のことをよく知りたい」だとか、「付き合いたい」だとか、そういった考えを持って近づいているようにしか見えない。

あんなチャラチャラしているような奴には、あの子は渡せないし、あの子が靡くわけがない。だから、僕が守ってあげないといけない。でも、あの子と関わりがない僕が守ったところで、あの子からしたらあいつと同じになってしまう。

じゃあ、あの子と関わり始められるきっかけがあればいいんだ。十月に行われる文化祭。これがあれば、どんなに関わりがない人でも、同じ目的の為に一丸となって努力して仲良くなり、友情が

芽生える。どんなに僕が上手く喋れなくても、運動音痴で失敗しても【努力は必ず報われる】って言葉があるから、僕が努力している姿を見せれば、きっとあの子に何かが伝わって、仲良くなれるかも知れない。仮にあの子と仲良くなれなかったとしても、文化祭で仲良くなれるのはあの子だけとは限らない。

この教室にいるクラスメイトみんなとも仲良くなれるかもしれない。つまり、あの子の友達や、あの子とよく喋っている人達と仲良くなることが出来れば、あの子と仲良くなれる可能性が上がるというわけだ。よく【外堀を埋める恋愛】といわれるやつだな。

僕は完全に一人で空気になっているが、クラスのみんなは仲良しでとても楽しそうだ。僕は会話に入ろうとはしないし、出来ない。でも、楽しそうな会話に入りたいなと思うことはある。

昨日のドラマがどうだったとか、流行のゲームがどうとか、SNSがどうとか、そういう風に話しているのをよく聞く。正直、僕は全くわからないが、そういうのを話題にすれば、上手く話が出来て、仲良くなれるのかもしれない。

今週のうちに文化祭で何をしたりするのか決めたり、役割を決めたりするのだろう。

そこで、あの子と同じ役割をやれば、急接近出来る。例えば、あの子が文化祭で使う掲示物とかを壁に貼るときに、あの子が貼りやすいように僕が体を張ったり、高いところは僕が貼ったりなんてしたら、物理的にも急接近出来るし、もしかしたら、僕のこと『気が利く人』なんて思ってくれて心理的にも急接近するのかもしれない。

でも、僕は分かっている。何があっても絶対にあの子と関わって仲良くなるなんて無理なことを。あの子だけじゃない。クラスメイト、先輩や後輩、教師とも、絶対に、関わることなんてできない。

僕は一生、誰かと話すなんて出来ない。

なぜなら僕は、この二年三組の教室の後ろの壁なのだから……。

運動が出来ないのも壁だから。実際動いたらどうなるかわからないし、きっと僕が本当に動いてしまったら学校が崩れてしまう。そうなったら、笑い事じゃない。

それに、勉強もこの教室でやっている教科しかわからない。だから、二年の範囲しか知らないし、移動教室になる芸術、家庭、理科はまるでわからない。

この学校が創立して十七年、そのうちの十年くらいは、誰か僕の声が聞こえる人がいないか試してみたが、誰一人としていなかった。だからもうこの学校の人たちと関係を築こうとするのは諦めたのだ。

でも、壁だからこそ、あの子のこともクラスメイトのこともよく見ることができた。

あの子の人として尊敬出来るところも、単純に僕が好みなところも、クラスメイト達のワイワイしたこの楽しい感じも、それに入っていって楽しそうなあの子をこの半年間、壁だったからこそ、たくさん見ることができたと思うのだ。だから、未だに、ものすごくみんなが羨ましくなってしまうけど、結局は壁で良かったな。なんて思うのだ。

そんなことを思っていると、学校の二校時の授業終了のチャイムが教室内に鳴り響く。

「はい。今日の授業はここまで。次の授業までに、教科書八十五ページから九十八ページまで目を通しておいてください。」

そう言って、授業をしていた国語の先生は出て行った。それからみんなは、次の授業の準備を始める。

次の教科は理科。僕は全くやったことがないから、どんなものかさっぱりわからないけど、理科の授業から帰ってきたあの子が楽しそうだったから、きっと面白い教科なはず。

そんな風に考えていたら、いつの間にかクラスメイトのほとんどが移動して、この教室に残っているのはあの子と他数名になっていた。このクラスのみんなは、こういう準備とかを、お喋りとか遊んだりしてゆっくりやってしまいそうなのに、とても機敏に動いて、この教室から出て行く。移動先で喋っているのかもしれないけど『それにしても早すぎるだろ。』とツッコみを入れたくなるほどだし、すぐいなくなってしまうのがなんだか寂しく感じる。

残っていたあの子達も今にも教室を出ようとしている。

この教室を出ていく生徒を見るとなんだか無性に『いってらっしゃい』と言いたくなる。というか、口に出してしまっている。口なんてないけど。

でも、誰にも聞こえてなんかいない。

たまに考えるのだ。どうしてこんなことを言いたくなるのか、考えても答えなんて出ないけど、一つ思うのは、【いってらっしゃい】という言葉には『行って帰って来てね』という言葉があるという。僕はみんなに帰って来て欲しいのだろうか?でも、進級するみんなにも同じく『いってらっしゃい』と言っている。帰ってこないのは分かっているのに。

いや、そういう帰って来て欲しいとかの意味じゃなくて、みんなを笑顔で送り出したい。きっと、そういった僕の気持ちなのかもしれない。

そう考えていたら、他の子もいなくなって、教室にはあの子だけが残っていて、教室の扉の前で足を止めている。すると、その瞬間あの子は急に振り返り

「キミ、今日は結構喋ってたね。全部聞こえてたよ。そのせいで私、授業に集中できなかったんだからね。」

僕に向かって、そう言った。

「え?」

僕は急に話しかけられたことに唖然としていた。

「ちょ、ちょっと待って! 聞こえるの? いつから?」

「もうずーっと! この教室に来てからね!」

「え……ええ?」

「文化祭、楽しもうね! じゃあ、いってきます!」

そう言って、僕が大好きなあの笑顔で、理科の教科書を抱えながら、僕に向かって手を振って、この二年三組の教室を出て行った。

そんなあの子の背中を見送りながら、僕は初めてあの子の名前をあの子に向かって呼んでみた。

「……いってらっしゃい。ちゃん!」

「外」
小林　紗都（星槎学園湘南校２年）

【優秀賞　エッセイ部門　受賞】

「星槎はみんなでつくる集合体」

星槎もみじ中学校
三年　堀口　尊斗

星槎はみんなでつくる集合体なんだ。
だって星の槎なんだ。
星の海を流れる槎。
それは即ち、この大地。この海。この世界。
地球はまさしく星槎、星の槎なんだ。
地球は一人の人間でできているかい？
一つの国でできているかい？
そんなわけないよね。
だから集合体なんだ。
ひとりぼっちでも出来ることはないわけじゃない。
でもそのひとりぼっちは、周りに人がいないだけじゃあないかい？
一人の時に、君は何をしている？
ゲームもいいね。
勉強かもしれない。
工作もありだね。
読本も楽しそうだ。
料理も出来るかな？
もういっそ寝るのもいいかもね。
じゃあ、考えてみよう。
そのゲーム機は誰が作ったんだい？　誰のお金で買ったんだい？
その参考書は誰が書いたんだい？　君が学び、咀嚼している物は誰の考えかな？
君が切っている紙は誰が作ったもの？　道具は君が思いついた物？
その小説は君が書いたのかい？　その世界は君の物語かな？
今炒めているお米は誰が育てたの？　振りかけている胡椒は君が育てたの？
君が寝ているベッドやソファーは誰が作ったの？　寝るための家を買ったお金は君のもの？
もしかしたら本当に自分で作った物があるかも知れない。
でも全てじゃないだろう？
こんなふうに、人の周りには必ず他人の物があるんだ。
人は人に支えられて生きている。
それは片方からじゃない。君も誰かを支えているんだ。
君の何気ない言葉に喜ぶ人が居る。
君の珍しくもない笑顔で笑える人が居る。
君のなんでもない気遣いで救われる人が居る。
生きているって素晴らしい！
星槎は小さな社会だ。社会の縮図なんだ。
この言葉は……ちょっと星槎だけにはとどまらないけれど。
ここまで話したのは全て社会の話だ。
まあ完全に当てはまるかと言ったら少しズレるかもしれない。
だって集合体だよ？　人が集まった物なんだよ？
ひとりひとり背丈も顔も声も心も違うんだよ？
そりゃズレるに決まってるさ。
その人同士でのズレがあるから社会の統治って難しい。
だから国ってひとつじゃないんだ。
だから人って争うんだ。
でもそう言われても割り切れる人と割り切れない人が居る。
だから不安になってしまうんだ。
どうやったところでこの問題は解決しないし、解決した時っていうのは人がいなくなった時か、人間が主体性、つまりは自分が何をしたい、何が好き、何が嫌い、何が楽しい、何が辛い。
こんな、ありふれた当たり前の感情が消えてしまった時こそが、この問題が解決した瞬間で、同時に人が人でなくなる瞬間なんだ。
だから人間は、この問題と向き合わなくちゃいけない。
寄り添わなくちゃいけない。
多数決をすれば負けた方は不満が募る。
でもみんな同じ意見だったらどう思う？

例えばみんなが国会議員だったとする。
もし戦争をするかしないかの話になって、
別に相手が悪いわけでもないのに、
「相手国を殲滅し切ろう」
だなんてそんな議題になっていたとしたら？
この判断が間違っていることは間違いない筈なんだ。
でも、この世界はみんな自分で考えない。
誰かの意見に便乗して、
「私も」
「僕も」
「俺も」
なんて声しか聞こえてこない。
この選択が間違っているなんてことにさえ気づけない。
だって考えてない。
「あの人がそうなら」
それだけ。
たった一言で無辜の人々が死んでいく。
そんな残酷で、荒唐無稽な世界。
こんな世界にならないためのストッパー。
それが個性、特徴、他との違い、多様性。
だから人はそれらを持ち合わせているんだ。
星槎には色々な人が居る。
面白い人。
元気な人。
優しい人。
賢い人。
寡黙な人。
どこまでも広がっていく人の輪。
これが星槎。これが星の槎。
人と人を繋ぎ、喜びや悲しみ、怒り、全てを分かち合い、認め合う。
そんなところに今私たちはいるんだ。
怖がらなくてもいい。強制なんてしない。
少しずつでいい。
手を取って、共に歩んでいけるように。
星の数をも超えて、さらなる可能性の明日へ。

【優秀賞　エッセイ部門　受賞】

「「楽しい」の代償」

星槎国際高等学校立川
三年　柴崎　雪乃

私は楽しいことがとっても大好きで、イベントなどでは大はしゃぎしています。
星槎という学校は、今でもじゅうぶん楽しいと思います。でも、「もっと楽しくなったら嬉しい！」と思いませんか？
しかし、私はそうは思いません。
「あれ？　さっき『楽しいことが大好き』って言ってなかった？」
確かに言いました。自分でも矛盾していると思います。
私は、「楽しい」という感情が怖いのです。

怖い、と思ってしまうのにはわけがあります。
私は、いつも自分のキャパシティーを超えた選択をしてしまい、それが原因で力尽きてしまいます。

私は、高校二年生の前期に生徒会役員になりました。それと同時に軽音楽部の副部長になり、少し後に部長にもなりました。
高校生になるまではリーダー的存在を担ったことはなく、「なれて嬉しい」「なったからには頑張ろう」「でも不安だな」と、たくさんの感情が心の中に渦巻きました。
私は、誰かを支えたり、一丸となって作業したりすることを苦

痛とは思わず、寧ろ好きなほうです。しかし、使命感が強いが故に熱量の加減が出来なくなってしまいます。そんなときは興奮状態が止まらなくて超ハイテンションになります。

私にとって「楽しい」という感情は、エネルギー量が凄まじく、あっという間に限界を超えて、燃え尽きてしまいます。だから、「楽しみすぎたらまた大変な思いをするかもしれない」と不安に思い、とても怖くなります。

楽しければ楽しいほど、そして、充実していればしているほど、「この楽しみの後には、オーバーヒートしてスイッチが完全にオフになってしまうんだろう」と想像してしまうのです。

「楽しかった」「嬉しかった」を皆と分かち合い余韻に浸った翌日には、たいてい『マイナスの自分』になっています。

小学六年生の夏休み明けのことでした。

お盆にレッスンを受けていたミュージカルの公演会があり、そこまで一年ほど練習を続けてきました。初舞台であり、セリフは少なかったのですが、私にとってとても難しいものでした。

公演会は大きな失敗もなく、無事最終公演まで終わりました。

今、私は楽しそうに語っています。でも、そんな最高な気持ちになっているときは、必ず大波が襲いかかり落胆してしまいます。

皆さんは、一気に「楽しい」が「苦しい」や「つらい」に変わっていく恐怖を体験したことはありますか？　楽しみと苦痛は比例し、大きければ大きいほど、ダメージも想定外の大きさで心身を支配してくるのです。

私は、それから学校に行けなくなりました。

今、振り返って考えてみると、高二のときは文化祭を限界状態で迎えていたのでしょう。文化祭準備期間は生徒会役員として、そして文化祭実行委員としてダブルで働き、軽音楽部のステージ発表のボーカルとしても練習をしていました。

文化祭を終え、やっぱり私は燃え尽きました。

それもこれも、星槎という学校が楽しすぎるのが原因です。

こういう言い方をすると、星槎のことを非難しているように聞こえるかもしれません。しかし、私は星槎のことが大好きです。星槎には、とても感謝しています。

私は今、高校生活を振り返って、とても後悔しています。

二年半のほとんどを、学校に行かないまま終えてしまいました。本当にもったいないことをしてしまったと思います。

つらくて苦しいときは物凄くたくさんありました。それに比べると、楽しいときは少なかったと思います。

でも、私の高校生活は「楽しかった」と胸を張って断言できます。

確かに、燃え尽きる前も、燃え尽きた後も、本当につらいし苦しかったです。でも、振り返ってみれば、全部自分のためになりました。

燃え尽きてしまうことは、決して悪いことではありません。そのときはつらくても、そのときがきたらポジティブに捉えられるようになります。

だから、今は苦しいけど、未来の私に期待しています。がんばれ、私。

「夏の水」
佐藤まりん（星槎国際高等学校仙台１年）

【審査員特別賞　詩部門　受賞】

「涙雨」

星槎国際高等学校富山
一年　吉田　茉央

せっかく芽吹いても
蟻と一緒に踏まれてしまう
もがいた形跡もないまま横ばい続きだった
義務という名の九年間

雨の降り始めのにおいは
失敗のにおいに似ていてほしい
傘を差して通る道は
わたしを責めてこないから

新芽は長雨によって育つ
時に水やりを怠ってしまっても
密かに芽は立派な花を咲かせ
あの日々に意味はあったと教えてくれた

雨上がりのにおいは
成功のにおいに似ていてほしい
傘をたたんだ後の景色は
すべてが新しく見えるから

【部門賞　小説部門　受賞】

「晩夏に散る」

星槎国際高等学校静岡
一年　小原　麗羽

ある夏の、補習の帰り道で、とても暑い、うだるような熱気の発するアスファルトの上を歩きながら俺たちは駄弁っていた。

「なあ、りぃ。俺今目の前に駄菓子屋が見える」

「奇遇だな、みぃた。僕にも、見える」

このクソ程暑い中で、目の前のぼろっちい建物で揺れる氷の文字。オアシスというのはこういう物をいうのだろう。

「なあ、奢ってやろうか？」

「僕も奢ってやるよ」

財布の中を確認してニヤリと笑って顔を見るとあいつもニヤッと笑っていた。

「じゃあ買いに行くか？」

「僕も買いに行こうじゃないか」

じわじわと泣きわめく蝉がうるさくて面倒くさかった。

「ありがとうございました」

買ってみるとあいつは棒アイスを持っていた。勿論と言っては何だが俺も棒アイスだった。

「お前かき氷にしないのか？」

「奇遇だな。貴様の手にしている物もアイスに見えるぞ」

俺たちの間を生温い夏風が通り過ぎて行った。

「俺の聞き間違いだろうけどお前奢るって言わなかったか？」

「……僕も聞き間違えたかもな」

沈黙の流れた俺たちの顎から汗の雫が伝って落ちた。

蝉が一層甲高く鳴いて沈黙は続いた。

「なあ、防波堤の方、行かないか？」

あいつがニヤッと笑った。俺は顎から滴る汗を拭って頷いた。あ

いつは軽快に笑ってアイスを持ったままで走り出して俺を振り返った。
「競争だぞ！　負けたらアイス次……いや、かき氷奢りだからな！」
「はあ？！　聞いてねえし！」
かき氷は意外と高くて３００円以上する。そんなものを二人分も買ったら俺のお小遣いは一網打尽だ。絶対嫌だ。
「……はぁ、はぁ、……」
ゼエゼエと喘ぎながら俺たちは防波堤の上でぐったりとしてアイスを握りしめていた。
「ぁあ！　アイス溶けてないかな！？」
「どぅえ？？！！　マジか」
「溶けてはなかったわ」
「んだよ。紛らわしい」
キラキラと眩い光を反射しながら寄せては返す海を見つめながらアイスの封を切りシャクシャクと咀嚼する。
「硬いと言えばさ」
何となく口にしてみた。
「俺の姉さんパスタの茹でる前のやつ揚げて食ってたんだけど」
「……カロリーと硬さ凄そうだな、それ」
「……歯茎にめちゃくちゃ刺さったぞ。俺が食ったら」
じわじわとシャワシャワと煩い蝉がジジっと木から飛び立った。
それに釣られて空を眺めると空はとても青く碧く蒼く藍く、白い雲を浮かべてそこにあった。
中にTシャツを着ているあいつは半袖ワイシャツの前を全開にして風を取り入れた。
「なあ、空を見てるとさあ。吸い込まれて蒼く染まって溶けそうに思うんだよね」
俺が言う前にあいつが笑いながら言った。
なんだか凄く驚いた。なんでだか。
何時もこいつは俺と同じような考えで。
何時も通じてたのに。
まるで会ったばかりの頃に同じだって知った時みたいで。
「……どうした？」
棒アイスの棒を銜えてあいつは俺を見た。
口に残った冷たいアイスの欠片を飲み込んで俺は笑って見せた。
「ポエムかよ。詩人になれるぞ」
あいつは、ははははっと笑って「そうかもな」と海を眺めて遠い目をした。
「なあ、りぃ、将来の夢ってあるか？」
喉が渇いて寂びれた雰囲気の自動販売機に小銭を投下した時にあいつが言った。
「……どうした。あ、あれか。作文。テストで出たやつ」
ガコンッと鈍い音を立てて飲み物が出てくる。キィと軽く音を出す取り出し口を開けて黄色の炭酸飲料を持つ。
「まぁ……そう言う事にしとこうじゃないか」
ニヤッと笑ってあいつは次いで小銭をこの鉄の塊に飲み込ませた。
「うーん…俺は夢…無いなぁ」
俺がそう言うとあいつは小銭を握る手に力を入れた。
「あ。僕これにしよう」
ガコンッとまた飲み物が排出される。あいつはそれを取ってカキッと蓋を回した。
黒い炭酸水が蓋周りに茶色い泡を作ってゴクゴクと音を立ててあいつの喉に飲み込まれていく。
「お前夢無いのか？」
あいつはコーラを口から離してキョトンとした顔で俺を見た。その顔に俺は少々びっくりした。
生温い潮風が俺たちの隙間を吹いていく。お前は違うのかと問いたくなったがあいつの顔を見て辞めた。キョトンとしつつもハッキリと戸惑いを顔に出しているあいつが何だか意外だった上に俺の心もそんな感じの心境だったからだ。
「……何で？」
呆然と俺を笑って見たあいつは戸惑っていた。
「何でって……夢なんて叶わないし。叶えられるのが奇跡なんだよ」

モクモクと入道雲が怪しくも美しい予感を持って立ち込める。汗をかき始めたペットボトルを持つ手に力を籠める。
「みぃたも夢無い人？　俺は無いよー。昔は夢あったけど諦めたわ」
どうにかしてこの沈黙を破ろうと俺は必死に話題を逸らした。
なあ、びっくりしたよ。
俺らって何時も一緒の考えだったじゃあないか。
小さい頃からさ。
実は違う人間だったって言うのも変だろうけど。
やっぱり何時も何時までも一緒って訳にはいかないんだろうなって。
思った。
ポタポタとペットボトルと顎やこめかみから汗が滴る。
防波堤から聞こえるさざ波の鳴き声が波立つ俺たちの心みたいで。
「僕は……っ…夢、そうだよなぁ。叶わないよな」
ははははっと心成しか乾いた声であいつは笑った。
何だか少しおかしく感じる。いつものあいつじゃない。
サぁッと生温い風が俺たちの隙間をいつも通り、通り過ぎたのに心許なくて。
「お前最近悩みあるか？　……いや、何でも無いよ。忘れろ」
頼りなく揺らいで見えたあいつを繋ぎ止めないと、と焦りを生んだ。
焦燥が暑さと共に身を焼いて焦がすようで。
「っ――――……」
あいつは目を丸くしてくしゃりと顔を歪めた。
「っあのな、俺――――……」
あいつが何かを口にしようとしていた時、突然に雨がパラパラとぱらつき始めた。すぐにざあざあと大降りの雨が降り始めて、俺たちは大慌てで色々な驚きの言葉を思いつく限り口にしながら走って木陰に避難した。
「めっちゃ降ってる！」
「うぅわ濡れる、濡れる！」
「いやもう濡れてるだろ！」
「そりゃそうだろ！」
「ふふ……あはははは！面白い！」
「お前めちゃくちゃびしょびしょだぞ！」
「オールバック！　似合う？！　似合うか？！」
「似あわないよ！　女子も逃げるぞ！」
「ふふ……ははは！！」
先ほどの重苦しい空気感なんて忘れて俺たちはバカみたいにはしゃぎあい、ひたすらに笑った。もうこれ以上ないくらい、まだ今までにも無いくらい楽しくて、でもこれからもそう思うことくらい何度もあって、その度に怒って泣いて笑って行くんだろうって、そう思っていたんだ。
それは口に出すこともないくらいに、確認することもないくらいに、
確約されて、
絶約されて、
確信して、
疑うなんて皆無、
間違うなんて絶無、
逸れるなんて微塵もなく、
違うなんて造作もなく、
その道を選ばない事なんて、
何より面白味が無かった。
ずっと、友達だと思ってた。
「なあ、りぃの昔持ってた棄てた夢ってなんだ？」
雨が静まってきたどんより雲の立ち込める空を見上げながらあいつは言った。
「捨てたって言い方は無いんじゃあないか？」
やけに拘るな、そう思った。
「気になってさ」
爽快に笑ってあいつは俺に微笑んだ。

どことなく気恥ずかしさを覚えながら俺は口に出した。
「昔さ、俺らって一緒の本を読んだりして将来作家になるって言ってたじゃん。でもいざ書いてみると難しくて。俺には才能が無いからさ」
口にしていて少し悲しくなった。今でも実は書いていた。
俺をヒーローにして、あいつはその付き人兼一番の理解者で、一番のライバル。
でも詰まってしまうし書けないし、言葉もしっくり来なくて。
キャラクターのデザインもぶれてしまうし……何度もやめたくなった。
あいつは少し驚いた顔をしていて、それから歪めて悲しいような切ないような顔をした。
「そんな約束……もう忘れていいのに」
ボソッと呟かれた言葉は俺の歓声にかき消されて行き場もなく消えた。
「おい！　晴れたぞ！」
キラキラと濡れたように、それでいて乾いたように青空が垣間見えて光が差し込んだ。
「ごめん、さっきなんか言ったか？」
俺が振り返ってあいつを見るとあいつは呆けたような顔をしていてとても笑えた。なんだ、その顔、と笑っている俺を見てあいつは雨の雫を落としながらふにゃふにゃと笑った。
「僕にも分かんないや」
光に照らされて俺たちは笑いあった。
「なあ、砂浜で寝転がって服乾かして行かないか？」
あいつがヘラヘラ笑ってワイシャツをグイッと引っ張って主張した。
「……いいじゃん！　なかなか主も悪よのう」
顔を突き合わせてニヤッと笑ってやる。いつもの俺たちだ。
なあ、お前がさっき俺に誤魔化した事って一体何なんだ。
隠すなよ。俺とお前の仲だろう。
お前が行き成り夢の話なんかふるから、変な勘繰りしてるじゃねえかよ。
俺とお前だろ。
俺とお前なんだから。

「砂浜っていつも熱いから寝転がれないけど雨の後って冷たいだろうなって狙ってたんだよね。」
あいつがのほほんと少し生乾きな砂浜に寝転がる。
真似して寝転がるとあいつは真っ直ぐに空を眺めていた。
なかなか空を眺めるって事をしてこなかったからだろうか。
空はどこまでも果てしなく蒼さはどの絵具よりも群を抜いて、気を抜くと自分が青になって消えてしまうかのような錯覚を覚える。
「こないだ、同じクラスの佐々木が彼女出来たって言ってたな」
あいつが照り付ける太陽を見ながら思い出したように呟いた。
ジワジワと鳴く蝉の声が響いて消えて。波の音も絶えず聞こえてきていて当たり前のその音に安心した。
「佐々木が？　あのモブっぽいやつだよな。なんで俺がモテないんだろ」
心からそう思って俺は砂を、どすっと蹴った。
「ははは。りぃを見ている奴もちゃんといるって。そう落ち込むなよ」
あいつがゴロンと寝返りをうって俺の方を向いた。キラキラと太陽と海の光を吸ってあいつの瞳が輝いている。濃い茶色の髪の毛がサラサラとあいつの輪郭をなぞって、光を零しながら風になびいて光を落とす。
にこっと、寂しげに笑うあいつは形の良い唇に薄く笑みを刷いて俺を見ていた。
切なさと言うか、悲しさと言うか、儚さと言うか。
俺にそういう感情が向けられている。心が傾いた気がして。
あぁ、やっぱりこいつ、俺に何か隠している。

不意に泣きそうな胸を締め付けられるような感情が込みあがってきて。
隠すなって言ってもこいつは俺に隠すだろうから。
ため込んでも良いことなんて無いし、どうせ解決何かしないんだ。
「見て。空がさ、ブラックホールみたいに僕らを飲み込みそうだと思わない？」
空に向けて真っ直ぐに手を伸ばしてあいつはキャラキャラと笑った。
「海と空って似てるよね。どっちも蒼くて広くて飲み込みそうじゃん？」
海から吹くしょっぱい風が乾いていく俺たちを撫で上げる。
「僕さ、昔、空に手を伸ばして……手が届かなかった事に凄く驚いたんだ。でも空に手が届かない事なんて当たり前だったし、実際雲が掴めるって確信していた訳じゃなくてさ」
懐かしそうに空を眺めて伸ばした手から光を透かしたり遮ったりしながら、あいつは、目を細めた。
ただただ単に眩しかっただけかもしれない。
でも俺には昔を供養しているように見えた。何故そう感じたのかは解らない。
でもあいつを一番近くで見ていたのは俺だったから。
「あの空に手が届くようになれば僕の願いや夢は叶うのかなぁ……なんて、僕も大概だよね。」
ケラケラと笑ってあいつは細めた目を閉じた。
なんて言えばいいのかなとか。
なんて返せば正解なのかなとか。
そんな事思ってない。
よいしょ、と立ち上がってあいつは俺を振り返った。
「僕が……夢って物を本気で追うって言ったら……お前は、馬鹿にする？　それとも止める？　それとも…応援してくれる？」
逆光で表情は窺えないがあいつは微笑んでいる気がした。
キラキラと濃い茶色の髪の毛が光に透かされて薄い茶色に見える。
甲高い鳴き声を上げながらゆりかもめが滑空していく。
妙に艶めかしい笑みが垣間見えて頭がクラッとした。
「応援っ……したいよ、？なんなんだ？　夢って」
俺が声を出そうとすると何故か喉の奥がキュッと絞まってなかなか声が出なかった。
妙に喉が渇く。
「でも、夢って叶わないんだろう？　お前、さっきそう言ったじゃんか」
ドキリとした。だってそう言ったからだ。でもこんな話をすると聞いていたらそんな回答はしなかった。でもそれは自分の意見を物に寄って変えるということで、それも腹が立った。
「あれは俺の意見だ。お前に押し付ける事ではないだろ」
ごもっともらしく意見して見るとあいつはふいっと海の方を見てしまった。
静かに寄せては返す波を見ていると、あいつがポツリと言った。
狡い。
そう聞こえた。
「なあ、海。飛び込んでみようぜ！」
クルッと振り替えったあいつにグイッと手を引かれた。
蝉の声が耳に戻ってきて俺は抵抗らしき抵抗するのも忘れてあいつに起き上がらされた。
「バシャッと行けば暑さも忘れるだろ！」
グイグイ引っ張られて俺はなされるがままに海の瀬戸際まで来ていた。
「ちょ……ちょ、おい！　待て、着替え無いって！」
「知らない！　行くぞ」
グイッと強く引っ張られて俺はめちゃくちゃに抵抗した。

「ちょ、ここは一緒に飛び込むところでしょう？！」
「い・や・だ！！」
グイグイと引っ張りあいながら俺たちは波の瀬戸際をバシャバシャ走りまわった。とうとう太ももまで海にどっぷり浸かってしまっている。
「来いよぉ！」
「いやいかん！」
「観念しろ！」
「い・や・だ！」
グイグイと引っ張りあって、とうとう俺は手を放してしまった。
「あ」
軽い声を出してあいつは海の波に向かって落ちていった。
「っつ――――……！！！」
思わず後を追って海に飛び込む。波の中であいつをキャッチして泡の中で抱きすくめる。強く抱きすくめて俺は海面を目指した。
「――――っぷはっ！！」
「ぷはぁっ！！」
ボタボタと髪やまつ毛から塩辛い雫を落として俺たちは呆けたように見つめあった。
最初に沈黙を破ったのはあいつだった。
「あはは！　足つくのに！　濡れたくなかったんじゃないの？！　アハハ！」
ケラケラと笑ってあいつは俺に水をかけてきた。
「ぅおっ！？」
びっくりして声をあげるとあいつはケラケラと笑った。

「濡れちゃったね」
「ああ、みぃたのせいでな」
後から分かったことなのだが、どうやらあいつは俺が追いかけて来ると分かった上で海に落ちるがままになっていたようなのだ。
濡れぼそってトボトボと帰宅中に、あいつはいつも奢ってくれないと言うのにいきなりアイスを奢ってくれた。

「どういう風の吹き回しだ？　おら。言えよぉ」
つつき回してもあいつは気分。とヘラヘラ笑うだけだった。
あぁ、楽しいな。
何時までも続いたらいいのに。
防波堤沿いを歩いていると、あいつが俺を呼び止めた。
「ん。何？」
スクールバックを肩に下げて、あいつは俺を見ていた。
紫がかったオレンジの空に照らされてあいつの濃い茶色の髪の毛が明るく染まる。ツクツクボウシの声が、蛙の鳴き声が何処からともなく聞こえてくる。
「っつ――――……僕、さ」
あいつが俺になにか言った。
「――――　　……？？？！」
何か言った。だがしかし、突然上がった花火の音にかき消されて届かなかった。
二人仲良く海の方を見るとそこでは大輪の花が咲いていた。
「船上花火の日だったのか……」
あいつがぽつり、呟いて、
一瞬で咲いて一瞬で散る花に、
俺たちは照らされて。
時が止まったかの様な錯覚に、
動くのは花火だけで、
俺たちは、照らされ続けた。

花火が終わって、
消炎の臭いが辺りに満ち、
オレンジの空が、
薄い暗さに変わっても、
俺たちはそこにいた。

「なぁ」
あいつがニヤッと笑ってバックからあるものを取り出した。
「お、お前、それは！」
驚愕に声が震える。
「そう……まさかのあれだ」
そう……――――
ドヤッと俺に向かってあいつはそれを突き出した。
「花火！」
花火を。
「一緒にやらないか？」
「やる。」
即答だった。

その後は想像にお任せする。
取り敢えず……俺も若いってことだけを言っておく。
火傷はしていない。
まあ、はしゃげる時にはしゃいでおきたいよな。
線香花火に照らされるあいつの顔を見ていた。
細い輪郭を温かい光がなぞる。
「なあ、俺とだけで良かったのか？」
「何が？」
「折角の花火なんだし。クラスの奴とか……呼びたかったかもなと思って」
「……いいよ。りぃとやりたかったんだよ」
「隣いっていいか？」

「いいよ」
時が止まった
気がした。
「なあ、僕……やっぱりお前のこと好きだわ」
「はは。何言ってんだ今更。幼稚園から一緒だったろ。俺もお前が一番の親友だよ」
線香花火がポトリと落ちた。
「だよなー」
あいつはにへらと笑って俺に少し寂しそうな声で言った。
「何時までも今のままのお前でいてな」
何故そんなことを寂しそうに俺に言うのか。
俺には分からなかった。
「もう帰らないと」
あいつがスッと立ち上がって俺に笑った。
笑みが俺に染み入ってきて俺の中で溶けていく。
「じゃあまたな。バイバイ」
あいつと家の前で別れて、あいつは俺に手を振った。
別れた後で気が付いた。あいつ、俺にまたなって言うことはあってもバイバイなんて言ったこと無いよな。
居ても立っても居られなくて俺は玄関から飛び出した。
あいつは俺の家の門のすぐそこに居て、追ってきた俺に目を丸くした。
「どうした？　なんか忘れ物あった？」
何でもないように笑うあいつの頬には涙と思わしき跡があった。
ギュッと心が締め付けられる。

「いや、あのだな、んー、また遊ぼうぜ」
あいつはフハッと笑って目をこすった。
「何それ。分かってるって。ほら、お前、おばさん心配するだろ。もう八時なんだから。帰りな」
グイグイと背中を押されて俺は家に戻らされた。あいつはもう一度俺に手を振って、帰って行った。

次の日からは俺だけが補習の毎日だった。あいつの家には灯りが灯らなかったが、あいつの家は里帰りをするから、そのたぐいだろうと思っていた。
夏が明けて、学校が始まった。
あいつには始業式でも会えなくて。
その日。
「転校した生徒がおります。――――――一緒に卒業できないのは悲しい事ですが――――――」
耳に入って来なかった。
転校。
俺は
聞いてない。
親友だった、のに。
そして時は過ぎていった。
ただ暑いだけの日が過ぎていった。
誰も彼もここにいるのにあいつはいなくて。
携帯も解約したのか繋がらなくて。
あの日の約束は、
また遊ぼう
だった。
何て言えばここにあいつはいたんだろうか。
あいつは俺に何回も言おうとしていたんじゃないのか。
教えてくれよ、なあ、

心にぽっかりと穴を開けたままの状態で俺は大人になった。

ある日。
本屋に寄った。
そこには有名な賞を受賞して、有名になった本が平積みに置かれていた。
『有名作家　木下樹　　顔を公開！　　インタビュー特集番組、今日放送！』
ドクンと心臓が高鳴った。
その顔は、
その髪は、
その瞳は、
その笑みは。
何処からどう見ても。
あいつだった。

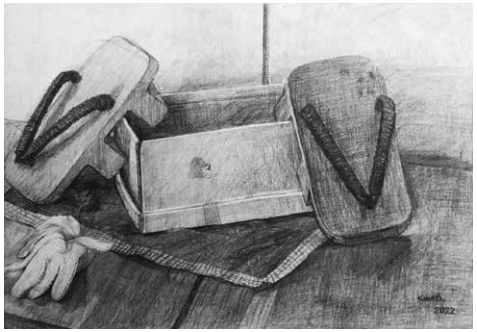
震える手で本を買った。
すぐに家に帰って、封を切った。
その本では、樹と言う高校生の男の子と、圭と言う同じく高校生の男の子が駄弁りながらアイスを買うシーンで始まっていた。
海に飛び込んだり。
競争をしたり。
花火をしたり。

何より気になったのはその物語は樹と圭の一人称で進む。
圭の気持ちは、俺があいつに抱く気持ちだったのだが。
樹の圭を見る気持ちは、そう、まるで、恋だった。
ふとした時の愛しさ、ふとした表情に潜む気持ち、言葉に隠した心、

隠しきれずに言ってしまう囁き、好きと言う気持ちに戸惑い拒絶してしまった日々、抑制して雁字搦めの想い。
好きと言う言葉を使わずに好きだと伝える毎日。
「……なあ、お前、いつもそんな気持ちで俺を見ていたのか？」
小説の一節にこんな言葉があった。
『僕は壊れてしまったのかな。同じ男の子なのに、こんな気持ちで。それとも僕のこの気持ちが正しくないといった世界が壊れているのかな。誰にも聞けないんだ。君に言いたいけれど言えない。僕は遠くに行くことにする』
遠くに行くと言った樹は圭に何も言わずに飛び出すのだ。この狭く狭く無情な世の中から。
テレビに映るあいつは全然変わってなかった。
「僕は昔好きな人がいて。その人に何も言わずに引っ越して、夢を追い続けました。そいつとは幼馴染で、本に書いたようなことをして最後に遊びました。どうしようもなく好きで、どうしようもなく楽しかった。そいつと本を読むのが好きで、だから作家になったんです。そいつとも将来作家になろうって言ってたんですが、そいつは諦めてしまっていた。約束をしたのですが……まだ果たされていないのです。メッセージ、いいですか？」
馬鹿だな、俺が見てるって……確証も無いのに。
「なあ、お前、悩んでないか？　僕にはもうパートナーがいるよ。何も言わずにいなくなってごめん。僕に、会いに来てくれますか……？」
画面越しにあいつがあの頃と全く変わらない笑みを見せた。
馬鹿、何でいなくなった、俺は何にも変わらないままで大人になったのに。
言いたいことは山のようにあって。
涙が堰を切ったように溢れて。
「なんて、届いているか分からないですよね。お時間有難うございました」
あいつがインタビューに戻った。
色々なことを聞かれながらも大人に対応するあいつはやっぱり変わっていた。あの頃とは。
どうしようもなくそれが悲しくて嬉しくて。
本の裏側の帯にパーティーのお知らせがあったのだがもうそれは終了している。
本の裏を見る。出版社の名前。
俺の住む場所はその出版社に近くはないが遠くもない。
俺は上着を掴むと家を飛び出した。
車に乗って、電車に乗って、地下鉄に乗り、コンビニで金を下ろした。
タクシーを拾って、乗り込みしばらくしたところで運転手に聞かれた。
「お兄さん、恋人とのデートに遅れでもした？それとも恋人の迎え？　仕事じゃないだろうし」
びっくりして何故か問いかけると運転手は軽快に笑った。
「そんなに急いで。それに長年の勘が愛しい人を待ってるって言ってるよ」
びっくりしたと同時に笑いそうになった。
「そんなんじゃないですよ」
運転手は何をしに行くのかと問うてきた。
「気持ちに気づけずに傷つけて、疎遠になっていた親友に会いに行くんですよ」
運転手はまたも軽快に笑った。
「親友、なんだねぇ。なかなか……青春じゃあないか」
青春だなんてこの人は俺を何歳に見ているのだろうか。
運転手は優しく微笑んで俺に言った。
「いや、やり残した青春を捕まえに行くのか」
言い得て妙、なかなか的を射ている発言に俺は頷いた。

出版社の前につく頃には、家を出発した時には夜だったのにもう朝になっていた。
流石に開いていない出版社に俺は少し脱力した。
何やってんだ俺。

近くのネットカフェに行き、軽食を摂り少し眠る。
昼の十二時になる頃には頭も少し落ち着いてきた。
チェックアウトする頃には昼の二時を回っていた。
小走りに出版社に向かうと少し人だかりが出来ていて期待に胸が疼いた。
近づくとどうやら違うようだ。
肩を落として振り返った。
「……みのる?」
「……りひと?」
あいつが、立っていた。
「稔、放送見てたのか？　早いな来るの。あれからどうしてた?」
喋っているあいつを見ていると勝手に涙が零れた。
「稔?」
「……馬鹿！どこ行ってたんだよ！　俺がどれだけ寂しかったか分かるのか?！　馬鹿！　親友だったろ！　お前なんか馬鹿だ、馬鹿だ……」
みっともなく泣いてあいつの肩を押す。
「受け入れられなくてもそばにいる事くらい出来ただろ！　馬鹿！馬鹿やろー、」
あいつは目を伏せて、それから俺を抱きしめた。
「うん、ごめんな。もう大丈夫だから。俺が隣にいなかった間の話、聞かせてよ」
「言われなくても語ってやるよ！　後悔しろよ、隣にいればよかったって。親友してれば良かったって。お前の話も聞くからな、絶対に聞くからな、」
離れて、涙でぐしゃぐしゃの顔で笑う。
ごめんな。受け止められないよ、好きって言うのは。
今も昔もお前は俺の親友だから。
「それでもいいか、?」
「それでいいよ。さあ、話そう?」
「「あのな――――」」



「静物」
河村　心暖（星槎国際高等学校浜松２年）

【部門賞　小論文部門　受賞】

「アイデンティティとリアリティー」
星槎学園高等部大宮校
三年　木口　菜月

「私はフェミニスト」だと公言することができない。
十八世紀末に始まった男女共生社会を目指すフェミニズム運動。二十一世紀の今、誤った印象を強く持たれている。そして日本では、ジェンダーギャップ指数ランキングは一五三ヵ国中一二一位、G７では最下位が現状だ。
ＳＮＳで「フェミニズム」と検索すると簡単に「フェミニスト」に対する誹謗中傷と捉えられる投稿を見つけられる。なかでも、「頭がおかしい」「自身の地位を認めたくないだけ」と、公言した有名人に対して、「好きだったのに残念」との投稿が見られる。特に印象的だったのは、「フェミニズムはともかくフェミニストが嫌い」という投稿だった。おそらく、勇気を出して発言して強気な言葉だけに焦点を当てて投稿したのだろう。
反フェミニスト運動は日本だけでなく、世界各国で起こっている。フェミニズム運動が盛んである地域こそ反対する声も多くなっている。
全てのことに当てはまるが、先頭に立つ者への風当たりはすごく強い。悔しい思いをし、フェミニストだと名乗って活動を始めた人。自分の影響力を活用して女性の価値を認めてもらおうと動いている人。女性だけでなく、男らしさという固定概念をなくそうと戦っている人もいる。一言でフェミニストは説明できないほど、奥が深く複雑だ。
私はこれからも「あなたが平等を信じるなら、あなたもフェミニストです」という言葉を信じて、堂々と生きていきたい。
女だからという理由で夢をあきらめたくはないし、目標を下げることもしたくない。私は一人の意志のある人間として妥協せず、理不尽な社会に立ち向かう必要がある。時間はかかるかもしれない。
それでも私は、性別という生まれ持った区別による差別を黙認する社会の変化を求めている。いつか、男女平等を求める活動が終わり、物議を醸した「フェミニスト」という言葉がなくなってほしい。人間そのものを評価してもらえる世の中になってほしい。
堂々と断言することから始めよう。私は平等を信じる「フェミニスト」だ。

【部門賞　エッセイ部門　受賞】

「僕が星槎に決めたわけ」
星槎学園高等部大宮校
二年　田中　晴也

「僕は結構、運が良い」
くじ引きもよく当たる。中学は、良い先生、良い友達に恵まれてとても楽しい学校生活だった。ただ勉強面はというと、国語・数学・英語・社会・理科の五教科が苦手だった。嫌いなわけではない、あくまで、「苦手」だった。
だから、自分が行ける高校なんてあまりないのでは、と困ってしまった。体育が好きで、友達ともまだまだいろんなことを学びたいのに……。
そのように、あれこれと悩んでいる時に、近所に僕でも通える学校を見つけたのだ。
それが、「星槎学園高等部大宮校」だった。
「ほら、やっぱり僕は運が良い！」
大宮校では、数学と英語は、習熟度別で基礎と標準でクラスが分かれており、自分のペースで学ぶことができる。これなら「自分に合っている！」と思った。そして、星槎の三つの約束「人を認める・人を排除しない・仲間を作る」に共感した。自分に合った学校で、勉強やスポーツ、仲間づくりをしたいと思った。

令和三年、春。僕は星槎学園大宮校に入学した。友達ができるかとても不安だったが、クラスの雰囲気が良く、すぐに仲良くなった。部活は、複数入部できるため、「eスポーツ」「卓球」「陸上」の三つの部活に入部した。大会にも出場した。また、星槎オリンピックのバスケ部門に参加し、とても良い思い出ができた。心配していた勉強も、先生が分かりやすく授業を行ってくれるため、ちゃんとついていけている。部活も勉強もとても充実して行うことができている。だから、色々なことにもっと挑戦していきたいと思う。

まず、取りたい資格や検定にチャレンジできるので、僕は、パソコン関係の資格取得に挑戦してみたい。さらに、大宮校ならではの「キャリアデザインプログラム」という体験授業に積極的に参加して、自分は何が得意で何が好きなのか、発見していきたい。

今、入学した頃より、自分が将来やりたいことが見えてきた。でも、残りの高校生活でまた変わるかもしれない。だけど、いつも前向きに考え、行動すれば、なんとかなると思う。

なんといっても、「僕は運が良い」のだから。

「私の心」
石原　采美（星槎学園横浜ポートサイド校１年）

【部門賞　詩部門　受賞】

「僕はクール」

星槎国際高等学校那覇
三年　上地　安人

僕はクール
多分まわりでは
そういうことになっている

「髪切った？めっちゃ似合ってる」
友達が言った
僕の心は日本晴れ

…でも僕はクール
にじみ出るドヤ顔をおさえこみ
「あぁ」
と一言

「ねぇ、一緒にトランプしない？」
ひそかに思うあの子が言った
僕の心はファンファーレ

…でも僕はクール
にやける口角を押し戻し
「おぉ」
と一言

「今日なんかいい事あったの？」
家族が言った
「んー、うん」
と、少しにやけながら一言

【部門賞　詩部門　受賞】

「ｃａｖｉｔｙ」

星槎国際高等学校八王子
二年　多比羅　興

そこは楽園
外から来た彼らの
みんなで築いた理想郷
彼らのたゆまぬ努力の成果
結晶で出来た大地を溶かし
彼らは大きな家を作った
およそ一億の家族たち
超巨大家族の完成だ
彼らを苦しめた洪水に
仲間たちを殺した天災に
もはや殺されることは無い
餌を取りに行く必要も無い
空から降ってくるのだ
素晴らしき理想郷
しかしある日
崩壊した
空が割れ大地が動く
天から何かが降りてくる
大雨とともに風が吹き荒れる
仲間がどんどん飲み込まれていく
自分たちの努力が破壊されていく
自分たちの居場所だけ潰すように
執拗に、入念に、破壊されていく
昨日までは特に何も無かったのに
少し前に餌も降ってきたのに
最後に彼らが聞いたのは
無慈悲な天からの声
「痛かったら左手をあげてください」

【部門賞　俳句部門　受賞】

星槎学園北斗校
一年　大澤　祐仁

ぶつかって　父の大きさ　逞しさ

【部門賞　短歌部門　受賞】

星槎国際高等学校大阪（高知高等学院）
二年　川田　瑚春

セーターの　糸がほつれた三時半　貴方の声で　ほぐれる心

【生徒会特別賞　俳句部門　受賞】

星槎国際高等学校八王子
三年　小林　碧

夏終わり　思い出占める　潮の味

【星槎大学長賞】

「共生社会実現に向けての考え方」

星槎国際高等学校郡山
三年　齋藤　優佳

障害のある者と障害のない者が共生するにはどうすればいいのでしょうか。私が考えたことを三つにまとめました。

まず、「違い」を悪だと思わないことが大切です。私がしていない見た目をしていたり、私がしないことをしていたり、私がしていない考え方をしていたりしていてもそれを「違い」とだけ受けとめることが差別のない世界の意識の持ち方だと思います。自分と違っていることに対して違和感がなくなることで、一人ひとりをみることができると思います。

そして、私は障害という名前がつくことはさして重要ではないと思っています。いちばん大事なのは困っていることに対してどう対処していくかです。名前に注目がいきがちですが、障害という名前がついたから困りごとが増えるわけでも減るわけでもありません。自分がつらいと思ったものは辛いし困ったことは困ったことです。それとどう付き合っていくか、あるいはどう軽減させるか、そこに集中するべきだと思います。とくにラベリングすることなく困り事をいかに解消して生活できるかが大切だと思います。

最終的に、自分が満たされていないから共生社会が実現していないのだと私は思っています。人はやはり支え、支えられて生きています。特に自分の中に余裕がないと相手を支えることはできても自分で自分を支えることはできません。他者を受け入れるために、自分を満たして余裕をつくることが、生きていく上でとても重要だと思います。

これらの三つは障害の有無に関わらず全ての人々が持ち合わせるべきものだと思っています。誰に対しても「違い」を受け入れ悪いものだと思わない、名前にとらわれずその人が困ったことに目を向ける、自分を労る。こうすることによって一人ひとりに合った生き方ができる共生社会を実現させることができるのではないでしょうか。

今回私は共生社会を広く見て考えました。人の障害となる部分はひとそれぞれでしょうし、何より私に具体的な案を考えることは難しかったです。小論文には根拠が必要です。では一体この小論文の根拠は何か。全て私の経験です。結局、共生社会とは皆が幸せになることなので、私が幸せになってこれにどれだけ信憑性があるのか証明してやろうと思います。

【星槎道都大学長賞】

「共生社会の実現」

星槎学園北斗校
三年　牧井　葵

私は、共生社会を実現するためにはまず最初に枠組みを無くすことからだと考える。私たちは自分と違う誰かを区別やジャンル分けして過ごしていた。例えば「障がい者」「ＬＧＢＴ」「外国人」その他にも様々な枠がある。しかし、「分けているけどみんな平等」に接するのではなく、「全てあわせて」共生社会と言うのではないだろうか。

共生社会を実現するために、私たちが出来ることはなんだろう。こう聞かれたとき、多くの人は「一人ひとりが自分とは違う誰かを理解すること。」「困っている人を見つけたら助けること。」と答えるだろう。しかし、私はお互いの理解を深めましょうと呼びかけたところで共生社会が実現できると考えていない。例えば、身体障がい者を対象とした世界最高峰の障がい者スポーツのパラリンピック。私はパラリンピックの開催で共生社会が実現できるなんて考えていない。身体障がいをもつ人達がスポーツをしている姿をただ観戦するのではなく、自分と同じ歳の障がいがある友達と一緒に学んだり遊んだりした、という経験が共生社会を実現させる一歩ではないだろうか。また、閉会式や開催期間を分けるのではなく、オリンピックの中にパラリンピックを入れれば、身体障がいをもつ人も活躍している姿を多くの人に見てもらえる。理解の呼びかけや単なる助け合いだけでは共生社会は実現しない。多様性を受け入れようと言いながらオリンピックとパラリンピックのように分けられている時点で、実現できない。

身近に自分とは違う誰かがいることが普通。そんな世の中になった時、初めて共生社会が実現したと呼べるのではないだろうか。そのためには一人ひとりが区別せず、また偏見を持たず同じように接する事が大切である。しかし、人間に対し偏見を持たないで過ごすことは不可能に近い。その上「障がい者」や「ＬＧＢＴ」などと無意識的に分けている時点で、共生社会の実現は夢に過ぎない。多文化共生社会も目標に挙げられている中、達成できる日は来るのだろうか。

「青春」
渡邉　葉月（星槎国際本部校１年）

【中学生部門賞　詩部門　受賞】

「空」

星槎学園中等部大宮校
二年　宮﨑　菜々子

空は、人の表情のようにいろいろな顔を持っている。
例えば、夏の空。
夏は朝から暑い日だってある。
その時の太陽がギラギラしている空は、
「ああ、夏だ。夏が来た。」と思えるような空。

秋の空。
秋は夏と比べて、暑くもなく、冬のように寒くもない。心地よい季節。
秋の空は、日差しが夏ほど激しくなくなる。
こんなにも私の心を落ち着かせる季節はない。
最高だ、秋の空。

冬の空。
冬は一年の中で最も寒い時期。雪が一面に降り積もる銀世界になる。
冬の空もまた美しい。
空は青色でも、夏のように暑い青ではなく、澄み切った青になる。
冬は、寒いだけではない事を知ってほしい。
そんな冬の空。

春の空。
冬のような寒い時から、だんだんと温かくなっていく。
桜が咲き、新しい一日が始まる季節。
また、動物たちも冬眠から目を覚ます。
なんとなく自分も新しい自分が来たんだなと
そんな気持ちになれる春の空。

【中学生部門賞　俳句部門　受賞】

星槎もみじ中学校
三年　岡崎　良亮

グラス見る　冷えてたソーダ　氷無い

【中学生部門賞　短歌部門　受賞】

星槎中学校
三年　飯塚　琉冬

たくさんの　友達できて嬉しいな
楽しい学校　もっともっと増えろ

「夕月の鳥」
浜元　瑠菜（星槎国際高等学校北九州２年）

「Liberty」
中村　桜季（星槎国際高等学校帯広専攻科）

星槎文芸大賞　実施要項（一部抜粋）

1. 目的

文芸創作活動に取り組むことで、関わり合いを大切にする星槎で育まれた感性を磨き、コミュニケーション能力、自己表現力を育て、作品を通した全国の仲間との交流の中で発見と感動の場をつくる

2. 応募資格

星槎国際高校及びフリースクール生、星槎学園高等部及び中等部、星槎中高校、星槎もみじ中学校、星槎名古屋中学校在籍生徒

3. 募集部門

①小説　②小論文　③エッセイ
④詩　⑤俳句　⑥短歌

4. 応募規定

①校内選考後の出品は生徒一人につき、一部門にしぼり、作品数も一点に限る
②応募作品は未発表作品に限り、他賞との二重投稿を禁止する
③受賞作品は発表時に修正を求める場合がある
④受賞作品の出版権などの諸権利は星槎国際高等学校に帰属する

編集後記

星槎学園大宮校　合田　晃治

星槎文芸大賞が星槎オリンピックの一部門となって、今年で八回目の開催となりました。今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染がなかなか収束に向かわない中、本作品集発行のため、ご協力いただきまして誠にありがとうございます。

今年度は、各校で選考された一二〇作品が集まりました。例年にも増して洗練された、すばらしい作品が数多く集まりました。

今年度も特別審査員として参加していただいた伊藤玄二郎先生（かまくら春秋社代表取締役、星槎大学教授）のご配慮により、今年度の受賞作品を文芸誌『詩とファンタジー』にて誌上発表していただき、著名な方々から講評をいただくことができました。また一昨年度からスタートした中学生部門もますます発展し、中学生から高校生まで活躍の場を広げることができました。

星槎国際高校は、昨年二月に開催された北京オリンピックにフィギュアスケート男子の部で出場し、見事に銀メダルを獲得した鍵山優真さんをはじめ、さまざまな種目でアスリートの生徒たちが大活躍しています。今後も星槎の若い力が存分に発揮されることでしょう。

さて、スポーツだけでなく「文芸の星槎」も年を重ねるにつれ、ますます充実してきています。

私たちは日々の暮らしのなかで、新しい出会いを経験し、また新しい情報に接しています。楽しい気持ちになったり、うれしい気持ちになったり、と同時につらい気持ちや悲しい気持ちも経験しながら毎日を過ごしています。そんな中で、ふと浮かんでくるフレーズがあります。しかしそれは過ぎゆく時間の流れの中に埋もれてしまい、いつしか消えてしまうものです。

私の友人に元ＮＨＫの記者で、ドキュメンタリー番組を制作してきた人がいます。彼はいつもメモ帳を持ち歩いています。私や他の仲間との雑談の場でも何か自分にとって心に引っかかった言葉をとにかくすぐメモしていました。

つまり私たちは「書く」という行為によって、過ぎゆく時間を「とどめおく」ことができるのです。作品はたいてい簡単なメモから始まるものです。一つのフレーズが新たな連想を呼び起こし、そこからまた・・・。「点」が「線」になり、独創的な世界が広がっていく。

私には一冊の本を読むと、気に入ったフレーズや、心に留まった言葉を書き抜く習慣があります。いわゆる「読書ノート」です。授業案を作成するときには、この切れ切れのフレーズ集がとても役に立ちます。

皆さんが書きとどめたものが、かりにつらい経験であったとしても、時間が経ってその記録を読み返したとき、「ああ、あのときあんなことがあったな」となつかしく思えるものです。書きとどめておいたからこそ「思い出」になるといえるでしょう。

今回各校舎から送られてくる皆さんの作品群はほんとうに素晴らしかったです。皆さんの感動や考えが見事に描かれていました。

この作品集を手にして、より多くの皆さんに共感の輪は広がっていくと確信します。「ああ、こんなことを考えている人がいる」「こんなすてきな言葉が使える人がいる」「こんな感性の持ち主がいる」…そして次回は、あなたもぜひ「思い」を言葉に変えてみましょう。

末筆ながら、本作品集刊行に至るまでご協力いただきました、塩谷実行委員長をはじめ、各委員の先生方、各校舎ご担当者様、誠にありがとうございました。そして素晴らしい作品をエントリーしてくれた生徒の皆さんに御礼申し上げます。来年度もより感性が発揮された作品が数多くエントリーされることを楽しみにしています。

編集委員

監　修　塩谷　貴男（文芸大賞実行委員長）
編集長　合田　晃治（星槎学園大宮校）
委　員　河原　理紗瑛（星槎学園大宮校）
委　員　高橋　佑介（星槎学園大宮校）
委　員　須田　心作（仙台学習センター）
委　員　脇屋　洋子（横浜鴨居学習センター）
委　員　天野　桂一（富山キャンパス）
委　員　大平奈美佳（那覇学習センター）

星槎文芸大賞　令和四年度受賞作品集

令和五年一月二三日発行
編集者　前田　豊
発行者　星槎国際高等学校
〒〇〇四―〇〇一四
北海道札幌市厚別区もみじ台北五丁目一二―一
ＴＥＬ　〇一一―八九九―三八三〇
ＦＡＸ　〇一一―八九九―三八三五
印刷　（株）横浜綜合写真